ROLES REPORT No.51

児玉誉士夫が語りたがらなかったこと

辻嘉六と日本自由党創設を中心に

小宮　京
Hitoshi KOMIYA

2026.1

ROLES Special Reports
東京大学 先端科学技術研究センター
Research Center for Advanced Science and Technology
The University of Tokyo

ROLES REPORT

ROLES REPORT No.51

児玉誉士夫が語りたがらなかったこと

辻嘉六と日本自由党創設を中心に

小宮　　京
Hitoshi　KOMIYA

2026.1

発行所：　東京大学先端科学技術研究センター
創発戦略研究オープンラボ（ROLES）
〒153-8904　東京都目黒区駒場 4-6-1
電話：　03-5452-5462
Web サイト：　https://roles.rcast.u-tokyo.ac.jp/

ROLES Special Reports
東京大学 先端科学技術研究センター
Research Center for Advanced Science and Technology
The University of Tokyo

はじめに

筆者は令和 4（2022）年に『語られざる占領下日本　公職追放から「保守本流」へ』（NHK ブックス）を上梓した。そこでは人々が語りたがらない占領下日本について論じ、広島カープ創設秘話、「バルカン政治家」三木武夫、フリーメイソンや田中角栄伝説について、その実像を明らかにした。

戦後史に関心のある方は、鳩山一郎が初代総裁（のち、吉田茂が総裁となる）となった日本自由党（以下、自由党）の創設に際して、児玉誉士夫が資金提供したという話を、どこかで耳にしたことがあるだろう。ロッキード事件に関わった、あの児玉である。

児玉の著書に関して、上海時代に接点のあった岩井英一は「〝事実相違〟〝事実無根〟ひじょうに多い」と指摘したうえで、「でたらめな記述はおそらく児玉自身、自分の箔をつけるために書いたか、いわゆる児玉ファミリーが虚像づくりのためにでっちあげたものだろう」と語ったという[1]。児玉と近い人物から見ると、虚像が独り歩きしているように見えるという指摘である。

児玉誉士夫の実像はいかなるものなのか。

本稿では、児玉があまり語りたがらなかったことに焦点をあて、その実像を明らかにしたい。

本稿が注目するのは辻嘉六という人物である。

宮澤喜一元首相は、辻トシ子が主宰する「三十六会」（さとろうかい）設立 40 周年を記念する会で、トシ子が益谷秀次の秘書となる経緯を話しながら、「伝説上」の辻嘉六の娘だと紹介した。辻嘉六はいかなる人物として語られてきたのか。宮澤の解説は次の通りである[2]。

> 「辻嘉六。誰でも知ってる名前であった（略）。戦後すぐに鳩山〔一郎〕さんが保守党を作ろうとし（略）たときに、すっかりお台所をまかなったのは辻嘉六さんだということは、これはなんとなく信じられていました」

なんとも宮澤らしい、慎重な言い回しである。

先だって、辻嘉六の遺書を見る機会に恵まれた。そこには児玉の名前も登場する[3]。千本木啓文氏から、辻嘉六と児玉との関係を聞かれたこともあり、整理する良い機会となった。ここからは辻嘉六に注目し、初代総裁の鳩山一郎の資料や周辺の証言を用いながら、児玉の実像を考察したい。ただし、宮澤が述べたように「伝説上」の話であるだけに、真偽が定まらぬことが多いことに留意されたい。

---

[1] 岩川隆『日本の地下人脈』（祥伝社文庫、2007 年）161 頁。

[2] 『三十六会　40 周年祝賀会　平成 13 年 10 月 10 日』映像。湘南技術センター株式会社会長・原田宏一氏と大﨑ひろみ氏にご提供頂いた。記して感謝する。

[3] 遺書の詳細は、千本木啓文「戦後 80 年の新発見！「けものみち」モデル〈伝説のフィクサー辻嘉六〉の遺言状」『文藝春秋』2026 年 1 月号を参照。

本文では、元号（西暦）で表記する。

日本自由党の創設をめぐる児玉誉士夫証言

日本自由党が結党されたとき、児玉誉士夫が資産を提供した、という話は、当事者の児玉の証言に基づく。

児玉の自伝、児玉にインタビューしたジャーナリスト（例えば、大森実）、さらに児玉関係の資料を調査した有馬哲夫ら、いずれも児玉側の証言をベースに描いた[4]。

児玉自身の発言は、次のようにまとめられる。

終戦後に、海軍が持っていた資産が児玉の手元に残った。全資産の目録を持参した児玉に対して、米内光政海軍大臣は次のように発言したという。

> 「それを受け取る海軍は、もうこの日本にいなくなった。むしろこの際、多数のきみの旧部下が路頭に迷わぬよう、生活の面倒をみてやってほしい。もしも残る幾分かがあれば、なにか国のためになることに使ってもらいたい」

それを聞きつけた辻嘉六が、次期政権の有力候補である鳩山一郎への献金を勧めた。そこで鳩山邸を訪問し、天皇制護持を唯一の条件として、「旧児玉機関にかんする全部の資産を、仲介者の辻老人を信じて提供した」という（下線部は引用者による。以下も同様）[5]。そして昭和 20（1945）年 12 月 2 日、児玉に逮捕命令が出た。年が明け、昭和 21（1946）年 1 月に、児玉は巣鴨拘置所に入る。

『鳩山一郎日記』より[6]

児玉証言では、鳩山と会った回数は分からない。むしろ、あまりに空白が多いことから、読者の誤解を誘うような証言となっている。

鳩山一郎が残した日記には、辻と児玉の名前が複数回登場する。まず、昭和 20 年 9 月 28 日に「辻、児玉両君」が来た。約 1 か月後の、10 月 23 日「辻、児玉、吉田三氏と中（ママ）食」とある。翌 24 日にも「吉田」

---

[4] 児玉誉士夫『悪政・銃声・乱世　風雲四十年の記録』（弘文堂、1961 年）、大森実『戦後秘史 1　日本崩壊』（講談社文庫、1981 年。元版は 1975 年刊）所収の「児玉誉士夫インタビュー」、有馬哲夫『児玉誉士夫　巨魁の昭和史』（文春新書、2013 年）。

[5] 児玉『悪政・銃声・乱世』360－370 頁。引用は 362、369 頁。

[6] 以下、伊藤隆・季武嘉也編『鳩山一郎・薫日記　上巻　鳩山一郎篇』（中央公論新社、1999 年）より引用した。辻や児玉、単独の登場には触れていない。

と会っているが、こちらは吉田茂であろう。23 日の吉田は「茂」ではなく、児玉機関の吉田彦太郎の可能性が高いのではないか。11 月 2 日にも「辻、児玉両氏来訪」とある。

辻嘉六は、昭和 23（1948）年 12 月 21 日に亡くなった。その前から、辻が危篤に陥ると、鳩山に連絡が来ている。そのたびに鳩山は辻邸を訪れた。一例を挙げると、12 月 19 日には「昏睡状態にて意識なし」と記す。興味深いのは、辻の葬儀の日の記述であろう。12 月 24 日に築地本願寺で葬儀が行われた。その後、鳩山は辻家に立ち寄った。そこに児玉がいたのだろうか。「児玉君本日釈放、早速辻君の霊に拝す」とある。

関連して、昭和 24（1949）年 1 月 12 日には、鳩山邸を「辻未亡人と長女」が訪問する。「長女」とはトシ子のことだろうか。

鳩山の日記からは、辻を非常に気に掛ける様子と、児玉がいつ巣鴨を出るかを把握しておらず、端的に児玉に興味がないことがうかがえる。鳩山の認識では、児玉は辻に紹介された人物に過ぎなかったように思われる。

児玉と辻嘉六の動向

鳩山邸を訪問した児玉の証言に目を転じる。

児玉は辻に案内されて鳩山邸を訪問したところに松野鶴平がおり、辻が「これは松野鶴平ではなく。天下のズル平だ。そのつもりで交際したまえ」と発言したという。鳩山との会見には松野は同席していないとする[7]。また、大森実のインタビューで児玉は、鳩山と辻がいた席に松野鶴平もいて「ズルヘイだ」と言われたとする。大森のインタビューでは楢橋渡も同席したことになっている[8]。

このように児玉は松野に会ったとするが、既に紹介した『鳩山日記』の 9 月 28 日、10 月 23 日、11 月 2 日、いずれの日にも「松野鶴平」は登場しない。「楢橋渡」の名前もない。つまり松野（＋楢橋）に会ったという児玉の発言が事実だとすれば、鳩山がいないところで児玉が松野に会った可能性を示唆する。

鳩山との会談の席上、児玉は鳩山に天皇制護持を訴えたとするが、他の政党、後の日本進歩党なども天皇制護持を唱えていた。つまり天皇制護持は鳩山に接近する決定打にはなり得ない。敗戦で海軍の影響力低下が明らかな状況で[9]、児玉は、新時代の有力者に接近する必要性があったであろう。

良く知られている通り、児玉は戦時中の昭和 17（1942）年の第 21 回衆議院議員選挙（いわゆる翼賛選挙）に非推薦候補として立候補したが、敗北した。戦後、児玉は昭和 20 年 10 月 25 日に「日本国民党結党

[7] 児玉『悪政・銃声・乱世』367 頁。

[8] 大森『戦後秘史 1 』所収「児玉誉士夫インタビュー」287-288 頁。

[9] 陸海軍省が廃止されたのは、1945（昭和 20）年 11 月 30 日である。また、第一復員省（旧陸軍省）の高官が、憲法改正案が作成される最中の 1946（昭和 21）年 2 月に、軍規定条項の削除を申し入れている（古関彰一『日本国憲法の誕生　増補改訂版』岩波現代文庫、2017 年、103-107 頁）。

準備会」を開いた。活動にいたらなかったとされるが[10]、『毎日新聞』は総選挙へ出馬と報じた[11]。12 月 2 日に GHQ より梨本宮守正王、平沼騏一郎元首相、広田弘毅元首相らを逮捕せよとの指令が出た。そこに児玉も含まれていた。その結果、日本国民党準備会は 12 月 6 日に解散を決定した[12]。要するに、翼賛選挙に立候補し、戦後も独自の政治活動を模索したが、12 月に戦犯容疑者となったことで、立候補の道が閉ざされたのである。政治活動には当然それなりの費用を要したであろう。

このように戦後の政治活動を模索するなか、児玉は政権が有力視される自由党に接近したかったのではないか。

そこで辻に依頼して鳩山へと接近した。選挙実務を担当する松野に会ったのだが、結果的にうまくいかなかった。少なくとも鳩山とは 9 月、10 月と二回会っており、10 月 23 日には吉田彦太郎が同席していたと推測される。この時、選挙資金を持っているかなど、確認していた可能性があろう。児玉は鳩山と意気投合したように後年話したが、自由党候補にはなれなかったため、並行して、10 月 25 日に日本国民党立ち上げに向け独自活動を開始した、という辺りが妥当な解釈ではないか。

12 月に逮捕されることが分かると、「病気のため」と入所延期を申請しつつ[13]、児玉は再び自由党に接近する。この時期の辻と児玉の動きを裏付ける証言が鳩山周辺に存在する。石橋正二郎によれば、松野鶴平が自由党の候補者選定の作業をしているところ、「いつもそばに辻嘉六氏や児玉誉士夫氏らがいた」。これは、松野が公職追放されて以降、つまり昭和 21 年 1 月の話という[14]。児玉が巣鴨に収監されたのは同年 1 月 25 日なので、収監されるまで、辻と石橋邸に通っていたことになる。なお、公職追放後も松野は非公式に選挙対策を行っていた[15]。このように鳩山側の認識では、基本的に辻と児玉はセットである。

証言した石橋正二郎はブリヂストンを創設した財界人である。鳩山の長男・威一郎（元大蔵次官。元外相）と、石橋の娘・安子が結婚していた。威一郎と安子の子供が、由紀夫（元首相）と邦夫（元総務大臣）である。戦時中の空襲の影響もあり、戦後、鳩山は麻布の石橋正二郎邸に住んでいた。

『鳩山日記』や石橋正二郎の証言から明らかなように、辻が行っていたのは、児玉を鳩山や自由党関係者に引き合わせることだった。児玉が収監される前まで、選挙担当の松野のもとに通いながら、候補者に顔を売っていたと考えられる。

---

[10] 猪野健治『児玉誉士夫の虚像と実像』（創魂出版、1970 年）148 頁。

[11] 「日本国民党」『毎日新聞』1945 年 10 月 26 日朝刊。他に「すでに 3 3 党派　在野の新人続々結党」『朝日新聞』1945 年 11 月 17 日朝刊も参照。

[12] 「日本国民党準備会解散」『読売新聞』1945 年 12 月 8 日朝刊。

[13] 「入所・入所延期氏名」『朝日新聞』1945 年 12 月 13 日朝刊。

[14] 石橋正二郎『雲は遥かに』（読売新聞社、1971 年）106 頁。

[15] 小宮京『自由民主党の誕生　総裁公選と組織政党論』（木鐸社、2010 年）36 頁。

三木武吉と親しくなった児玉

これまで児玉が辻嘉六を通じて、自由党に政治献金をしたことから、鳩山総裁に接近したと考えられていた。だが、既に述べた通り、鳩山との交渉は不調に終わったように思われる。この間、自由党に多額の献金をしたならば、鳩山総裁や河野一郎幹事長との関係が深くなったのではないか。

その後、辻に連れられて、鳩山や自由党の候補者たちに顔を売るなかで、児玉が最も親しくなったのは三木武吉だった。そこにも辻が介在している。

辻嘉六の「遺書」、その証人の最初に登場するのは「原玉重」という弁護士である[16]。

原は三木武吉の側近であり、三木の地盤を継いで代議士を務めたこともある。筆者はかつて原の遺族の了解を得て、その資料「私の経歴書」を紹介した。そこには「昭和 18 年 3 月」に南京で「児玉（？）」と会見とある。また、原が辻の法律顧問となったのは「昭和 21 年 9 月」のことであった[17]。原は三木武吉と同じく、戦前は民政党系の政治家であった。そのため、政友会系であった辻との関係はなかったようだ[18]。戦後に、三木武吉が鳩山に協力することになり[19]、それと前後して三木側近の原も辻との接点が生じたと考えられよう。こうして、原は辻―児玉と接点を持った。そして、辻が死去した際は「〔辻の〕遺言により遺言執行者となった」のである[20]。ちなみに、辻が「遺言」を残したのは昭和 23 年 11 月 29 日の可能性が高い。『鳩山日記』に、辻が「遺言せんと原弁護士を呼びし由」とある[21]。

このように見てくると、児玉は辻を介する形で、三木武吉―原玉重のラインとつながったとまとめられる。その後、三木武吉を経由して、河野一郎らとの関係が深くなった。児玉本人は、死ぬ間際の三木武吉に頼まれたことで、河野と「深く付合うことになった」と語っている[22]。

余談であるが、追放中の鳩山が手元不如意だったため車を用立てた、と児玉が語ったことがある[23]。これに対して、鳩山の長男・威一郎は「車を用立てたり、なんて話も知らない」と真っ向から否定した。威一郎によれば、実際に面倒を見ていたのは大久保留次郎だという[24]。鳩山を支持する勢力は様々に分かれており[25]、大久保は、三木武吉・河野の系統とは違う。それゆえ、鳩山周辺ならば知っているはずの情報を、三木武吉経由の情報しか入らない児玉は知らなかったのだと推測できよう。威一郎の発言を踏まえると、一円も

---

16 千本木「「けものみち」モデル〈伝説のフィクサー辻嘉六〉の遺言状」388 頁。残る四人は児玉の関係者である。

17 原玉重「私の経歴書」服部信也・昌子編『原玉重　八十八年の歩み』（原てる、1985 年）所収、85 頁。『桃山法学』第 19 号（2012 年）で紹介した。

18 「第 2 回国会　衆議院　不当財産取引調査特別委員会　第 13 号　昭和 23 年 4 月 7 日」。原によれば、辻と「私がそういう関係にあるのはここ二、三年」「今のような関係は終戦後がおも」という。

19 なお、三木武吉が日本自由党の初代総務会長という事実は存在しない。小宮『自由民主党の誕生』34 頁。

20 原「私の経歴書」85 頁。

21 『鳩山日記』1948（昭和 23）年 11 月 29 日。

22 児玉誉士夫『われかく戦えり　児玉誉士夫随想・対談』（広済堂出版、1975 年）252 頁。

23 児玉『悪政・銃声・乱世』373 頁、児玉『われかく戦えり』260 頁。

24 毎日新聞政治部編『黒幕・児玉誉士夫　自民党にからまりつく不気味な影』（エール出版社、1976 年）32、154 頁。

25 鳩山派の内情については、小宮京・中島政希「〈シリーズ　対談「石橋湛山と戦後政治家」第 1 回（上）〉鳩山一郎」『自由思想』176 号（2025 年）所収を参照。

支出していないにもかかわらず、児玉は鳩山の面倒を見たと虚偽を述べたことになる。

そのような児玉が自由党に「全部の資産」を提供したと語ったとして、信じられるものだろうか。

次に、児玉の提供した資産について考察したい。

児玉が提供した資産はいくらだったのか？

児玉が自由党に提供した資産はどんなものだったのか。

一般的な理解では、児玉の話した「全部の資産」に注目が集まり、児玉機関の莫大な資産を提供したものと理解されている。

しかしながら、既に引用した通り、米内海相は、第一に部下の面倒を見よと命じたうえで、「もしも残る幾分かがあれば、なにか国のためになることに使ってもらいたい」と続けたとされる。この米内発言を踏まえれば、全財産を自由党につぎ込むとは到底考えられない。

有馬は米内の真意は財産隠匿にあり、必要なときに児玉に換金してもらうことだと考察した。児玉機関の資産が海軍関係者の「遺族年金」の原資となった可能性も示唆する。同時に、有馬は自由党にもかなりの金額を献金したと指摘する[26]。有馬は、児玉の供述を踏まえ、献金額を 1000 万円とした[27]。また、児玉はある時に「現金で約 5000 万円ぐらい」と語り[28]、大森に対しては現金 7000 万円とダイヤモンドを鳩山に渡したと語った[29]。証言は一定せず、時間とともに金額が大きくなっていく。なお、後述する児玉の記者会見と児玉機関関係者の話を踏まえると、1000 万単位の現金が手元にあったとは考えにくい。

昭和 20 年 12 月時点では、児玉は記者会見で、児玉機関の総資産は 32 億超とし、中国大陸の資産 32 億は海軍を通じ中国に接収されたこと、日本国内に移した資金 1 億円のうち、7500 万円を鉱山開発に投じ、「残額 2500 万円は鉱山の後始末と復員軍人救済育英事業その他に投出し現在手許にあるのは 590 万円である」と公表した[30]。590 万円のうち、370 万円を浮浪者収容所にあて、100 万円で東京都に公衆食堂を作る、アメリカ研究所と立教大学へ 50 万円、学徒や土木請負者の厚生事業へ 30 万円を投出す、と述べた[31]。合計すると 550 万円となる。全てを実行していたならば、児玉機関の資産は現金 40 万円程度しか残らなかった計算になる。また、児玉は米内発言に従い、軍人対応への資金提供を優先したことが分かる。

---

[26] 有馬『児玉誉士夫』85-86 頁。

[27] 有馬『児玉誉士夫』83 頁。1953 年 7 月 2 日付 CIA 文書。

[28] 猪野『児玉誉士夫の虚像と実像』145-146 頁。

[29] 大森『戦後秘史 1 』所収「児玉誉士夫インタビュー」283-284 頁。

[30] 「取引高卅五億円　利得金は寄附　児玉誉士夫氏」『毎日新聞』1945 年 12 月 6 日朝刊。

[31] 「戦時利得なんと卅三億円　大陸舞台に三年、謎とく児玉機関」『読売新聞』1945 年 12 月 6 日朝刊。「一切の財産を“輿論”に解放　「児玉機関」がまづ戦災孤児援護事業」『読売新聞』1945 年 11 月 24 日朝刊も参照。

児玉以外の証言を確認する。

児玉機関の資産について、児玉機関関係者が国会で答弁していた。昭和 23 年の不当財産取引調査特別委員会で、「辻嘉六氏をめぐる政治資金に関する件」が取り上げられ、吉田彦太郎、高源重吉らも証言した（以下、特記しない限り、『国会会議録』からの引用）。

不当財産取引調査特別委員会が認定した、吉田彦太郎らが辻嘉六に行った献金額は「650 万円」である[32]。調書では、「辻嘉六氏は昭和 21 年から 22 年 10 月までの間に、緑産業株式会社社長吉田彦太郎から 300 万円、新夕刊新聞社社長高源重吉から 100 万円」を受領したとされる。吉田彦太郎によれば、300 万円の内訳は「昭和 22 年の 8 月もしくは 9 月ごろ 100 万円は渡しました。それから戦争中から終戦後まで引続き 10 万円とか 20 万円とか渡した金が、延べるとやはり 200 万円近く」であったという。

吉田の証言に従うならば、戦争中から終戦後までに辻に渡した資金は、延べ「200 万近く」でしかなかった。児玉が言及した 1000 万単位とは一つ桁が違っており、到底届かない。

吉田によれば、「私の手もとというか、そのときに残つておつた金が……。結局それは児玉が戦犯に指名されまして、全部進駐軍の方でお調べになつております（中略）ある程度処分しましたときに児玉が戦犯関係になつて、戦犯関係の特定財産ということで自由にならないようになりました」という。つまり、吉田個人の資産ではなく、児玉機関の資産について話していた。終戦時に「大体 4000 万円くらいの金があつた」とする[33]。「結局建物になつて残つたり、鉱山の設備になつて残つたりしておりまして、そういう不動産は今でも大分残つておりますが、金の方はほとんど残つておらぬのであります」と、土地や設備に使ったという。結果的に、最後に渡した 100 万円を調達する際に苦労し、「今度が最後くらいならあつちこつち何とか借金ができるかもしれぬというようなわけで、100 万円こしらえてもつていきました」という。最後には借金して、辻に渡した。つまり、児玉機関には現金がそれほど残っていなかったのである。高源重吉が 10 数回にわけて献金した 100 万円も同様で「大部分は借金」であった。戦後になるとインフレが進んでいたことにも注意が必要である。

そこまでして吉田や高源らが辻の要求に答えたのはなぜか。

戦前、上京した吉田は大化会に入った。「大化会の会長の岩田冨美夫という人のおやじみたいにしておつたのが辻さんであります。その関係でときどきお供をして行つております間に非常に可愛がられまして、私はほんとうの親みたいなつもりでおりました」（吉田の証言）、「昭和 8、9 年頃からの交友関係ですが、非常に世話になつた人」「青年時代に非常に厄介になつたということに対して、向うの要望があれば今後ともにそれに対して御恩返しをするという心持以外にはない」（以上、高源の証言）、つまり、辻の世話になってい

[32] 「第 2 回国会　衆議院　本会議　第 52 号　昭和 23 年 5 月 29 日」、武藤運十郎の発言。

[33] これに対して、巣鴨拘置所での 1947 年 4 月 21 日付取調べによると、児玉機関の資産総額は当時の日本円に換算して 7000 万円あったという。児玉はその資産の 3 分の 2 を吉田彦太郎に与えたとしており、有馬は吉田が述べた 4000 万円と符合するとした（有馬『児玉誉士夫』82―83 頁）。だが、不当財産委の吉田答弁を読む限り、本文で指摘した通り、吉田個人の資産ではなく、児玉機関の資産について話している。有馬によれば、児玉が話す資産の全容は約 3000 万～7000 万と幅があり、かつ国際検察局の取り調べでも「資産の全貌を解明したわけではない」とする（有馬『児玉誉士夫』80―85 頁）。本文で後述するように、児玉は資産の半分しか GHQ に渡さなかった旨、述べたことがある。

るから、献金の依頼を断れなかったのである。なお、辻邸は、大化会と庭続きの場所にあったという[34]。

事情は児玉も同様だったろう。昭和 17 年頃の児玉を知る軍関係者は「辻嘉六の児分であったころ」と表現している[35]。そうした経緯があり、児玉と関係のあった緑産業に、辻が倉石忠雄を推薦したところ、倉石が会長に就任したという[36]。

吉田らが借金してまで調達した資金を政治家にどんどん渡す辻の行動について、吉田は「いやな道楽をもつているとは思つておりました」「人に金をやつて喜んでおる。私から無理して金をつくらして、随分変な道楽があるものだ」と、嫌な気持を持っていたことを吐露した。このように、辻は児玉らからすると、逆らうことのできない相手であった。それゆえ、求められるままに資金を提供するしかなかった。

当時の政党の台所事情として、石橋正二郎によれば、松野鶴平の面接を通り抜け、公認を勝ち取った候補者には「公認料 1 万円」が渡された。その公認料は「300 人分は渡されたと記憶する」[37]。つまり、昭和 21 年の衆議院議員総選挙に向けて、公認料だけで 300 万円かかったのである。昭和 20 年末の児玉の記者会見を踏まえた額、現金 40 万円では全く足りない。別のところで児玉の語った 1000 万円が正確な数字だと仮定しても、公認料の 3 倍程度の資金で、政党活動の全てをまかなうのは難しいのではないか[38]。

他の献金者との比較も重要であろう。辻が集めた資金は、吉田彦太郎らだけにとどまらない。不当財産委では、中曽根幾太郎という人物から 250 万円の献金を受けたと認定されている。中曽根は昭和 22（1947）年の総選挙に自由党公認として出馬し、落選した。それ以外の人々からも、辻のもとに資金提供があっただろうことは想像に難くない。同じく昭和 22 年に出馬した尾津喜之助の事例では、1000 万円の持参金を持って行ったという（金額はそこまで大きくないとの説もある）。持参金を持つ尾津を各党がリクルートし、結局、自由党から出馬するも落選した[39]。このように、かなりの額を持参すれば、自由党の公認候補となることもある。児玉が鳩山と会ったときに提示した額はいくらだったのか。

また、自由党ではなく、日本進歩党の例としては、昭和 20 年、総裁選出のために 300 万円を準備する必要があった大麻唯男に依頼され、田中角栄が 100 万円を用立てたとされる[40]。それまで政界と縁のなかった田中は、進歩党公認候補として昭和 21 年の総選挙を戦ったものの敗北した。

他に、自由党結党時、毎日新聞記者として取材にあたっていた西山柳造は「私が接触した限りでは、常盤家時代には鳩山にはそんな資金〔辻経由の児玉資金〕が流れた気配はなく、もっぱら河野が世話をしていたように見受けられた。児玉の資金が流れたとすれば、もっと後の話かもしれないが真相は分からない」と

---

[34] 山口達郎「落第生時代」『私のアルバム』（中部経済新聞社、1966 年）所収、31 頁。

[35]『偕行』299 号（1976 年）58 頁。

[36] 『倉石忠雄　その人と時代』（倉石忠雄先生顕彰会、1987 年）241 頁。

[37] 石橋『雲は遥かに』106 頁。

[38] 参考までに直近の例を紹介する。2024 年総選挙時に、自民党は支部（事実上、候補者）に対して 2000 万円を支出した。内訳は公認料 500 万、活動費 1500 万である。これは政党支部に対する支出のみで、党本部の運営や日常活動には別途資金が必要なのは言うまでもない。

[39] 猪野『児玉誉士夫の虚像と実像』155-156 頁。

[40] 冨森叡児『戦後保守党史』（現代教養文庫、1994 年）25-26 頁。

した[41]。

いずれにせよ、児玉が自由党に多額の現金を提供したとは考えづらいと結論付けられよう。

ダイヤモンドはどこへ？

ところで、児玉機関の資産は現金だけだったのか。

もとは海軍由来のものだから、モリブデンやタングステン、ラジウムなどの戦略物資が主であった。有馬によれば、GHQ のＧ２や国際検察局による児玉の取り調べでは触れていないが、ダイヤモンドやプラチナといった貴金属、いわゆる「光物」が含まれていたのは間違いなく、とりわけ「戦争末期の短い期間」に「光物」を集めることにシフトしたという[42]。それら「全部」を、児玉は自由党に提供したのだろうか。

児玉機関の物資は、戦後に GHQ から接収された。その時、GHQ に持っていかれるぐらいなら「半分ちょうだいしておけってんで半分ごまかしたんだ。それで児玉機関の地下室に入れた」[43]。残ったものを自由党に提供したという。

ダイヤモンドはどれくらいの量があったのか。

中国大陸からダイヤモンドやプラチナなどを朝日新聞社の飛行機で日本に運んだ岩田幸雄（元広島県モーターボート競走会・会長）は、次のように証言した。「金の延べ棒、プラチナ、ダイヤモンド、ヒスイなど、軽くてしかも値のはるものを選んで載せたのだが、なにしろ詰め込みすぎて飛行機が浮きあがるかどうかが問題」だった。それだけ大量の「軽くて値のはるもの」を運んだということである[44]。

これに対して、自由党初代幹事長だった河野一郎の関係者によれば、河野はダイヤモンドを新円に換えた話をしていた。だが「一袋とかそんなオーバーな話じゃない」という[45]。ちなみに、新円切替が実施されたのは昭和 21 年 2 月のことである。河野の死去直前に直接話を聞いたとする渡辺恒雄は、河野がダイヤモンドを売ったとし、「手のひらいっぱいといわれたダイヤモンド」と付け加えた[46]。その他にプラチナや金（きん）などが含まれていたとしても、果たして「手のひらいっぱい」、もしくは一袋に満たない程度のダイヤモンドで飛行機が浮かなくなるものだろうか。その程度の量しか自由党に提供しなかったとすれば、残りはどこに行ったのか。

---

41 西山柳造「常盤家を舞台に自由党結党」『政治記者の目と耳　昭和の激動期を取材して　第 4 集』（政治記者 OB 会、1999 年）所収、216 頁。

42 有馬『児玉誉士夫』54 頁。

43 児玉『われかく戦えり』308 頁。

44 岩川『日本の地下人脈』123-124 頁。興味深いのは、岩田が戦時中に日本に送金していたお金について「児玉誉士夫、吉田彦太郎、高源重吉の三人はおれが送金していた金を使ってしまったんだよ。終戦直後の金にして数百万円はあったと思う」という（同、124 頁）。岩田証言が事実であり、この現金が児玉機関の資産に計上されていなければ、児玉の手元にはもう少し現金が残っていたことになる。

45 毎日新聞政治部編『黒幕・児玉誉士夫』23 頁。

46 渡辺恒雄『政治の密室』（雪華社、1966 年）132 頁。

興味深いこととして、既に引用した、昭和 36（1961）年刊の『悪政・銃声・乱世』では「旧児玉機関にかんする全部の資産」として、ダイヤモンドには言及していない[47]。ところが、昭和 41（1966）年のインタビューでは「現金で約 5000 万円ぐらい。そのほか金、プラチナ、ダイヤなど」と言及し[48]、昭和 50（1975）年刊の『われかく戦えり』では「ダイヤとプラチナ」に言及した[49]。時系列から明らかなように、児玉がダイヤモンドを強調するようになったのは、実際に扱った河野一郎が、昭和 40（1965）年に亡くなった後のことである。鳩山は昭和 34（1959）年に亡くなっていた。

このように児玉がダイヤモンドに言及せざるを得なくなったのは、当時の時代背景が影響したと考えられる。それは松本清張の『日本の黒い霧』が社会現象として広まったことである。のち『日本の黒い霧』単行本に収められる「征服者とダイヤモンド」は昭和 35（1960）年の『文藝春秋』38 巻 7 号に発表された。このように占領下の資産に光が当てられたことで、児玉も言及せざるを得なくなったのではないか。

辻嘉六邸と児玉機関の資産

巣鴨拘置所から出所した児玉は、釣り三昧の日々をおくった。そうした毎日をおくれる背景には、資産を隠し持っていたのではないか、との指摘もある[50]。

釈放後の児玉は、昭和 23 年 12 月 28 日、総額 25 万―40 万ドル相当のラジウムを GHQ に持ち込んだ[51]。つまり児玉は資産を隠し持っていたのである。

児玉はラジウムをどこに隠していたのか。

辻嘉六は広大な屋敷を構え、書生らを住まわせていた。児玉によれば、辻が「庭に埋めてた」ところ、辻が亡くなった時、遺族が掘り返すと、みかん箱 2 つ分くらいの分量のラジウムが出てきた、という[52]。前述した通り、巣鴨から出てきた児玉は、昭和 23 年 12 月 24 日に辻邸を訪れた（『鳩山日記』）。果たして、庭に埋まっていたのはラジウムだけだったのか。いずれにせよ、ラジウムの話は、児玉が GHQ の目の届かない辻の屋敷に資産を隠していた可能性を示唆する。

児玉が辻に託したであろう資産に辻が全く手を付けなかったのか、吉田らが辻に渡した資金が何に使われどこへ行ったのか、あるいはどこにも提供されず辻の屋敷にそのまま残っていたのか、関係者が亡くなった今、もはや誰にも分からない。

---

[47] 児玉『悪政・銃声・乱世』369 頁。

[48] 『週刊文春』1966（昭和 41）年 6 月 13 日号、猪野『児玉誉士夫の虚像と実像』146 頁より再引用。

[49] 児玉『われかく戦えり』308 頁。

[50] 竹森久朝『見えざる政府　児玉誉士夫とその黒の人脈』（白石書店、1976 年）57 頁。有馬は、「光物」以外の物資は戦争末期の輸送状況では持ち帰れず、中国の現地に隠したと考えるべき、と指摘した（有馬『児玉誉士夫』86 頁）。

[51] 春名幹男『秘密のファイル　CIA の対日工作』上巻（新潮文庫、2003 年）348-350 頁。

[52] 大森『戦後秘史 1』所収「児玉誉士夫インタビュー」284-287 頁。辻の遺産を探すにしても、遺族がなぜ庭を掘り返そうと思ったのかは謎である。

おわりに

本稿では、児玉誉士夫があまり語りたがらなかったことに注目し、辻嘉六の存在を踏まえ、論じた。

児玉は巣鴨に入る前に日本自由党に資産を提供したと考えられてきた。当時の状況や鳩山周辺の資料を踏まえると、児玉が自由党に接近したがうまくいかず、巣鴨入りが決定したあとに再度接近したと論じた。児玉は資産を提供するのみならず、辻嘉六に伴われて、鳩山や自由党関係者に顔を売っていたと考えられる。自由党関係者のなかで、児玉と関係が最も深くなったのは三木武吉である。それも鳩山経由ではなく、むしろ辻嘉六の法律顧問であった原玉重を通じて、三木武吉との関係が生じた。つまり、辻嘉六経由で人脈が形成されたのである。このように、児玉と戦後政界との関係において、辻嘉六こそが決定的な役割を果たしたと考えられよう。辻は児玉に、その人脈を継承させたように思われる。児玉が自由党に莫大な資産提供を行ったことを強調したのは、政治献金により政治家との関係を築いた、と描こうとしたと考えられる。それは辻との関係を薄めるためであろう。すなわち、戦後政界との関係は、辻からの紹介なり、人脈の継承であったことを隠すために、自由党に「全部の資産」を提供したという話を吹聴したと考えられる。

そのうえで、児玉が自由党に提供したものについても考察した。

そもそも児玉が記す米内光政海軍大臣の発言を踏まえると、海軍関係者の面倒を見ることが最優先であったと考えられる。「残る幾分か」しか自由党に提供できなかっただろう。だが、児玉は自伝で、辻に「全部の資産」を預けた、それは自由党に行った、と語った。これは甚だ疑問である。実際のところ、児玉が提供した資産が本当に自由党に行ったのか、判然としない。ブラックボックスである辻が介在することで、児玉機関の資産は所在不明となってしまう。

第一に、児玉が辻嘉六に依頼されて自由党に「全部の資産」を提供したというのは、きわめて疑わしい。辻嘉六に依頼され、児玉が一定の資金を提供したのは事実であろう。しかしながら、児玉は現金をさほど有しておらず、大口の献金は出来なかったと考えられる。それから児玉機関の吉田彦太郎らの証言からは、辻へはさほど大きな資金は提供されていなかったことが分かる。

次期政権を狙う鳩山のもとには、芦田均ら戦前からの鳩山派、戦後に鳩山のもとに馳せ参じた石橋湛山や三木武吉、他にも多くの政治家が集まってきた。財界からの献金者も多かったはずである。その意味で、辻や児玉の証言だけを重視するのは一面的にすぎよう。

第二に、第一とも関わるが、現金以外のダイヤモンドなどの資産を「全部」提供した事実も、おそらく存在しない。実態としては、児玉は隠し持っていた資産の一部（ごく一部？）を提供したに過ぎなかったと考えられる。しかしながら、自由党の鳩山総裁と河野幹事長という証言者がいなくなったところで、「全部の」現金やダイヤモンドなどを提供したと語った。結果的に、いくら渡ったのかは分からないのに「「自由党は

児玉が……」というレッテルだけは残った」[53]。児玉が自由党に提供した資産を大きく見せることは、児玉の手元に残った資産を小さく見せることでもある。ダイヤモンドなどの残りの資産がどこに行ったのかは、児玉やその関係者にしか分からない。

以上二点については、確たる資料がないため、推測でしか有り得ないということに留意されたい。

そのうえで第三に、児玉機関が集めた資産の一部が辻嘉六邸に持ち込まれていたのは確実であろう。ただ、何が持ち込まれ、どれだけ残っていたかは全く分からない。

ここまで考察してきたことを踏まえ、戦後、児玉と辻の間で何が起きたかを推測したい。

米内発言を素直に読めば、児玉にとっての最優先事項は部下（拡張して海軍関係者）の面倒を見ることである。そのために資産を保全するよう、児玉は行動した。戦時中から付き合いのあった辻嘉六が児玉に自由党への献金を求める。児玉は戦犯容疑者に指名され、児玉機関の資産がGHQに没収される可能性も高い。そこで児玉は辻を頼ったのではないか。辻の要請に応じて自由党に献金することを条件に、児玉が辻に児玉機関の資産を預け、辻は資産を隠匿する。戦前から、辻のもとには様々なところから資金が集まり、どこかへと出ていく。児玉機関の資産が隠匿されていても目を引くことはない。その引き換えに辻は児玉に人脈を紹介した。児玉が巣鴨に入ると、辻は児玉機関の吉田彦太郎らにも現金を要求する。吉田らは児玉機関の資産を預かる辻の要求に応じざるを得ない。辻は亡くなる直前の「遺書」で、児玉を案じる言葉を残す。児玉が出所すると、辻の元に預けられた資産が返還された。

以上が、戦後に児玉と辻の間で起きた出来事ではないか、というのが筆者の推測である。

最後に、浮かんできた疑問を述べたい。

児玉と日本自由党創設の関係の薄さは分かるとして、冒頭で触れた「お台所をまかなったのは辻嘉六さんだということは、これはなんとなく信じられていました」という宮澤の発言にあったように、辻嘉六が資金調達に関わったのは事実であろう。鳩山に児玉を紹介し、児玉に資産を提供させた。このように辻と児玉の関係がかなり深かったのは間違いない。

それにもかかわらず、GHQの児玉関係ファイルには辻の名前が出てこないという[54]。

一方、辻嘉六のもとに、GHQの将校が出入りしていたことは、トシ子が証言したことがある[55]。辻邸に児玉機関の資産が隠されていた場合、GHQはその存在を本当に知らなかったのだろうか。

果たしてGHQと辻嘉六との関係はいかなるものだったのか、一つの謎が残された。

---

[53] 毎日新聞政治部編『黒幕・児玉誉士夫』23頁。

[54] 進藤翔大郎先生のご教示による。

[55] 石井妙子「昭和史玉手箱　忘れえぬ女たち　(11)鳩山一郎と父の葬儀　辻トシ子」『本の話』16巻1号（2010年）66－67頁。

ROLES

Special Reports